

# コンドーム購入および使用における 公式的規範意識と非公式的規範意識

樋口 匡貴・中村菜々子<sup>1</sup>

(2009年10月6日受理)

Formal and Informal Normative Beliefs Regarding Purchasing and Using Condoms

Masataka Higuchi and Nanako Nakamura

**Abstract:** Properly using condoms is one of the most effective types of protection against HIV. To clarify the contents of normative beliefs regarding purchasing and using condoms, 390 undergraduate student volunteers were surveyed. The exploratory and confirmatory factor analyses revealed that both males and females held two types of normative beliefs, namely formal normative beliefs and informal normative beliefs, regarding purchasing and using condoms. Formal normative beliefs were concerned with the necessity of condoms on the one hand, while informal normative beliefs were concerned with private norms within reference groups on the other. Moreover, a *t*-test revealed a significant gender difference in formal normative beliefs regarding purchasing condoms, with females regarding purchasing condoms as less necessary than males did. These results were discussed from the view of HIV prevention education.

Key words: HIV prevention, condom, purchasing condoms, using condoms, normative beliefs

キーワード: HIV 感染予防, コンドーム, コンドーム購入, コンドーム使用, 規範意識

## 問 題

本研究は、大学生を対象に、コンドーム使用に関する規範意識の検討を試みるものである。

HIV (human immunodeficiency virus: ヒト免疫不全ウイルス) 感染や AIDS (acquired immunodeficiency syndrome: 後天性免疫不全症候群) の問題は、現代社会にとって喫緊の課題である。厚生労働省エイズ動向委員会報告 (2009) によると、HIV 感染者や AIDS 患者の報告者数は年々増加を続けており、特に20歳以降の増加が目立っている。HIV への感染経路としては、性的接触がその80% 近くを占めている。10代後半より性的接触の機会が増加する (日本性教育協会, 2007) ことを考えると、大学における適切な予防指導・

教育が急務であると考えられる。

性的接触による感染が多い現状を踏まえると、現実的かつ効果的な HIV 感染予防行動はコンドームの適切な使用である。コンドーム使用の促進を目指した研究において注目されてきた1つの要因が規範意識である。

この領域の研究のほとんどは、Ajzen (1985) の計画的行動理論 (Theory of Planned Behavior) の重要な構成要素である主観的規範意識 (subjective norm) に焦点を当ててきた。主観的規範とは、ある行動に関する賛成、非賛成といった周囲の人々の意見や希望に関する個人の知覚である (Jemmott & Jemmott, 2000)。そして、「周りの人は私がコンドームを使うべきだと考えているだろう」という主観的規範意識が、コンドーム使用行動意図を高めることが示されてきている (e.g., DiClemente, 1991; Jemmott, Jemmott, & Hacker, 1992; Sánchez-García & Batista-Foguet, 2007)。

<sup>1</sup> 兵庫教育大学発達心理臨床研究センター

しかしながら、コンドームに関連した規範意識に関する過去の研究では、不十分な点も存在する。

一般的に規範意識とは、特定の集団や社会において推奨される行動様式に関する意識を指す (Reber & Reber, 2001)。コンドームに関連した規範意識としては、“使用すべき”、“買うべき”といった HIV 感染予防行動の観点からみた場合望ましい方向の規範意識が存在する一方で、“使うべきでない”、“買うべきでない”といった方向の規範意識も存在すると考えられる。たとえば Helweg-Larsen & Collins (1994) は、UCLA 多次元コンドーム態度尺度の作成において、“コンドームを使おうと言いつ出すような人は野暮ったい”といった項目から構成される「コンドーム使用者に対する偏見」因子を見出ししている。こういった偏見の存在は、“コンドームを使うなんて格好が悪い”といった意識を生み出しかねない。コンドームに関連した規範意識についてのこれまでの研究では、こうした望ましくない方向での規範意識については体系的な検討が行われてきてはいない。これが第1の問題点である。

さらに、上述のようにコンドームに関連した規範意識については主観的規範意識が目されてきたため、規範意識の内容については研究の関心となっていなかった。そのために、規範意識の具体的な内容、すなわち規範意識の下位尺度構造については、未だ検討が十分になされていない。“使うべき”、“購入すべき”といった望ましい方向での規範意識については、望ましくない妊娠の予防や HIV を含む性感染症の感染予防といった観点から使用すべきであるということが想定可能である。一方で“使うべきでない”、“買うべきでない”といった望ましくない方向での規範意識については、“コンドームを使う人は野暮ったい” (Helweg-Larsen & Collins, 1994) といった意識のみならず、様々な意味内容が考えられる。たとえばコンドームは性的な商品であり、種々の条例 (cf. 長崎県少年保護育成条例第9条の2) 等に例示されるように年齢によっては、使うべきでないという規範もあるだろう。また、現在日本において流通しているコンドームはそのほとんどが男性用であることから、「女性は使うべきではない」というように、性役割規範による影響も受けるだろう。事実、男性に比べて女性の方が、コンドーム使用や購入に関する自己効力感が低く、ネガティブな態度を所有しており、実際の行動が行われにくいことが示されている (e.g., Farmer & Meston, 2006)。このように規範意識には複数の下位尺度が想定可能であるにもかかわらず、これまでの研究では十分整理されていない。この点が第2の問題点である。

以上のことより、本研究ではコンドーム使用および

購入行動に関する規範意識について、先行研究を踏まえて内容を整理し、尺度の下位構造を検討することを目的とする。さらにこの規範意識の構造に関する性差についても検討する。これらの検討によって、先行研究において抽象的な「主観的規範意識」として1次元で扱われてきた規範意識の概念構造を、具体的に明らかにすることができる。それにより、将来的にはコンドーム使用を有意に阻害する規範意識が同定可能になる。この情報は健康教育において介入ターゲットとすべき規範を具体的に挙げるために有益である。

なおコンドーム使用に関しては、購入段階、持ち運び段階、保存段階、使用段階、処分段階の5つの段階があるとされているが (e.g., Moore, Dahl, Gorn, & Weinberg, 2006)、本研究では、そのうち最も重要な段階である使用段階に加え、コンドーム使用に至るまでの最初の段階である購入段階に注目して検討を行った。

## 方 法

### 調査対象者および調査実施方法

調査は、コンドーム購入および使用の2条件に分けて実施された。コンドーム購入条件に関しては、中国地方のA大学生161名および関東地方のB大学生43名を対象に行われた (男性84名、女性114名、不明6名; 平均年齢20.34歳,  $SD=1.33$ )。一方コンドーム使用条件に関しては、中国地方C大学生113名および関東地方のB大学生73名が調査対象者であった (男性89名、女性85名、不明12名; 平均年齢20.40歳,  $SD=1.02$ )。A大学においてはスノーボールサンプリングによる宿題調査法を用い、B大学およびC大学においては集合調査法を用いて調査を実施した。

### 調査用紙の内容

調査対象者には、各条件に対応した場面を提示し、その場面におかれたと想定させた上で、規範意識に関連する質問項目に回答を求めた。提示した場面は、コンドーム購入条件においては、“ドラッグストアやコンビニエンスストアでコンドームを買う時”、コンドーム使用条件においては、“セックスの際に、コンドームを使用する時 (パートナーにコンドームの使用を依頼・提案する時)”であった。質問項目への回答は、いずれも“当てはまらない”(1点)から“非常に当てはまる”(4点)の4段階評定であった。またこれ以外に人口統計学的変数 (性別、年齢) を尋ねた。なお、調査用紙の表紙には、無記名で実施されプライバシーは保護されること、回答中に不愉快になった場合には回答を直ちにやめても構わないことの2点を明記した。

質問項目の設定

コンドーム購入や使用を阻害する規範意識の具体的な内容を幅広く収集する目的で予備調査を行った。大学生および大学院生8名が対象であった(男性4名, 女性4名; 平均年齢22.88歳, SD=2.10)。予備調査は宿題調査法で行われ, コンドームを買うべきでないと考えている人, 使用すべきでないと考えている人がいると想定させ, それぞれの理由についていくつでも自由記述を求めるものであった。予備調査の結果, コンドーム購入に関しては38件, コンドーム使用に関しては42件の記述が得られた。これらの記述の中から, 単純にコンドーム購入や使用ができない理由を記述したもの(例: 恥ずかしいから)を除外し, 意味内容が同一のものを整理した。

予備調査の結果得られた規範意識の具体的な内容に加え, Helweg-Larsen & Collins (1994) が示した「コンドーム使用者に対する偏見」因子の項目を参考に, 合計11項目の規範意識測定項目を作成した。その際, コンドーム購入および使用の両条件で共通して使用可能なワーディングを用いた。具体的な項目の内容はTable 1に示した。

結果

分析に際しては, 全ての調査対象者からのデータを使用した。その際, 項目の欠損値に関しては項目平均値を代入して分析に使用した。

コンドーム購入および使用に関する規範意識の構造

規範意識を測定した11項目について, 条件ごとに探索的因子分析を行った。いずれの条件においても主因

子法を用いた。固有値の推移から, 両条件ともに2因子解が妥当であると判断し, プロマックス回転を行った。各因子の回転前寄与率は, 購入条件では22.33%と15.51%で, 使用条件では26.94%と14.34%であった。探索的因子分析の結果をTable 1に示す。

この2因子構造について, 構造方程式モデリングを用いた確証的因子分析を行ったところ, 購入条件においてはGFI=.92, AGFI=.86, CFI=.90, RMSEA=.08, 使用条件においてはGFI=.95, AGFI=.91, CFI=.97, RMSEA=.05となり, データと2因子構造のモデルの適合が十分であることが示された。

各因子に強く負荷する項目は両条件において同一であったため, 両条件で共通した構造であると判断し, 因子負荷量の高い項目を参考に因子の解釈を行った。探索的因子分析における第1因子は, “この行動はダサイことだと思う”, “コンドームを使うような人はやぼったいと思う”, “コンドームを使うような人はおくびょう者だと思う”といった項目が高い正の負荷量を示していた。それに対して第2因子は, “私にとって絶対に必要な行動だと思う”, “その行動はしなくてはならないものだろう”, “大人である以上, 必要な行動だと思う”といった項目が高い正の負荷量を示していた。学校をはじめとする教育機関で公式的に伝えられる規範意識は第2因子の方であり, それに対して第1因子は, Helweg-Larsen & Collins (1994) の示す「コンドーム使用者に対する偏見」因子に非常に似通っており, 仲間内やある特定の準拠集団内で流通している規範意識であると考えられる。そこで第1因子は「非公式的規範意識」因子, 第2因子は「公式的規範意識」因子と命名した。

Table 1 コンドーム購入および使用に関する規範意識の構造 (主因子法プロマックス回転後因子パターン行列)

	コンドーム購入条件		コンドーム使用条件	
	非公式的 規範意識	公式的 規範意識	非公式的 規範意識	公式的 規範意識
この行動はダサイことだと思う	.71	-.02	.69	-.04
コンドームを使うような人はやぼったいと思う	.69	.11	.76	-.01
コンドームを使うような人はおくびょう者だと思う	.56	.09	.82	.01
この行動は年齢的に私にはまだ早いと思う	.56	-.01	.39	-.09
そんなことをするなんて格好が悪いと思う	.48	-.23	.77	.14
セックスの最中にコンドームを使うことでしらけてしまうだろう	.40	.06	.33	-.07
私がするべきではない行動だと思う	.32	-.28	.34	-.09
私にとって絶対に必要な行動だと思う	.10	.85	-.05	.77
その行動はしなくてはならないものだろう	-.02	.82	.03	.68
大人である以上, 必要な行動だと思う	-.07	.52	.01	.64
この行動をきちんとするのがカッコいいことだと思う	.09	.46	-.10	.52
因子間相関	-.18		-.20	

### 規範意識における性差

上記の規範意識の構造は、性を問わず同一の構造を仮定した上での検討であった。しかしながら、構造そのものに性差が存在する可能性は否定できない。そこで、上記の2因子構造が男女それぞれに適用できるかどうかを検討するために、男性および女性の母集団を仮定した多母集団同時分析による確証的因子分析を実施した。その結果得られた適合度指標は、購入条件では  $GFI=.89$ ,  $AGFI=.81$ ,  $CFI=.89$ ,  $RMSEA=.07$  となり、使用条件では  $GFI=.86$ ,  $AGFI=.78$ ,  $CFI=.94$ ,  $RMSEA=.08$  となった。使用条件における  $AGFI$  の値が若干低いその他の値から総合的に判断した場合、モデルは適合していると判断可能である。さらに両因子間の相関係数の値が性によって異なるかどうかを検討したところ、購入条件においては  $CR=0.96$ 、使用条件においては  $CR=1.08$  となり、いずれも5%水準で有意な値ではなかった。これらの結果より、規範意識の構造に関しては、性差は認められないといえる。

次に、各因子の得点における性差を検討するために、各条件別、性別に各因子の平均値および標準偏差を算出した。その際因子の得点としては、Table 1に示した探索的因子分析の結果得られた標準化因子得点を使用した (Table 2)。各条件および因子ごとに  $t$  検定を用いて性差の検討をしたところ、コンドーム購入条件における公式的規範意識の得点に関して、性によって有意な差がみられた ( $t(196)=4.50, p<.001$ )。すなわち、コンドーム購入に関しては女性よりも男性の方が必要な行動だ、という意識が強いという結果であった。これ以外の得点に関しては、5%水準で有意な平均値の差は見られなかった。

Table 2 2種類の規範意識の性別平均値(標準偏差)

	コンドーム購入条件		コンドーム使用条件	
	非公式的 規範意識	公式的 規範意識	非公式的 規範意識	公式的 規範意識
男性	-0.10 (0.84)	0.33 (0.92)	0.00 (0.96)	-0.03 (0.91)
女性	0.09 (0.93)	-0.24 (0.86)	-0.08 (0.65)	0.03 (0.88)

## 考 察

本研究は、コンドーム購入および使用行動に関する規範意識について、その内容の構造を検討し、性差を確認することが目的であった。

得られた結果より、コンドーム購入、使用ともに、規範意識は非公式規範意識と公式的規範意識の2因子

構造であることが示された。この構造は男女で共通のものであった。この両因子は一見すると単なる促進方向の規範意識と抑制方向の規範意識のように見受けられるが、得られた2因子間の相関の値は小さいものであった。この結果は、「コンドームを使うことは必要だとは思いますが、ダサイとも思う」といった形で、2種類の意味合いの異なる規範意識が両立して存在していることを意味する。また規範意識の得点については、部分的に平均値に性差がみだされ、女性は男性よりもコンドームを購入する必要性を低く見積もっていることが示された。以下、2種類の規範意識の内容について考察する。

まず公式的規範意識は、特に必要性の認知を示す項目から構成されていた。コンドームの購入や使用を促進する方向での意識という点において、公式的規範意識はコンドーム購入や使用の規範意識に関する先行研究 (e.g., Sánchez-García & Batista-Foguet, 2007) において扱われてきた主観的規範意識と対応するものである。

2009年現在の小学校、中学校および高等学校の学習指導要領においては、体育や保健体育の時間に性および健康に関する教育を実施することが求められている。本研究で調査の対象とした大学生のほとんどはこれらの教育過程を経ていることから、公式的規範意識は、公的に行われる教育によって育成されていると考えられる。

一方非公式的規範意識は、“ダサイ”、“やほったい”、“おくびょう者だ”といった項目から構成されており、この規範意識が公的な教育によって備わるとは考えにくい。この規範意識は上述のように、仲間内やある特定の準拠集団内だけの規範意識であると考えられる。仲間内での非公式な規範意識を扱った研究に菅原・永房・佐々木・藤澤・薊(2006)がある。菅原他(2006)は、電車の床に座る、電車の中で飲食するといった道徳に関連する行動に関する検討において、“友達のみんがやっていることに乗り遅れたくない”といった仲間内での規範意識によって、迷惑行動が促進されることを示している。すなわち、個人の行動が、世間一般での公的な規範ではなく、仲間内での私的な規範によって影響されるという結果である。菅原他(2006)の研究からは、本研究で示されたコンドームに関する非公式的規範意識についてもコンドーム購入や使用を阻害する方向で影響を及ぼす可能性が類推される。

これらの規範意識に関して男女で共通の構造が得られたということは、本研究で使用した項目が今後の研究に尺度として利用可能であることを意味する。これら2種類の規範意識については、コンドーム購入や使

用との関連を前提として収集された項目によって構成されている。しかしながら実際にどの程度の影響力を持っているのかについては不明である。今後はコンドーム購入や使用に対する影響力の強さについても検討していく必要があるだろう。

さらに公式的規範意識がコンドーム購入や使用を促進し、非公式規範意識が阻害しているのだとすれば、その規範意識に対する介入によって適切な行動変容が期待できる。ただし規範意識には、本来の意味合いにおいて社会や集団がその背後に存在する。したがって介入を検討する際には、個人単位ではなく、集団やコミュニティ単位で実施していく必要があるだろう。

## 【引用文献】

- Ajzen, I. (1985). From intentions to actions: A theory of planned behavior. In J. Kuhl & J. Beckmann (Eds.) *Action-control: From cognition to behavior* (pp.11-39), Heidelberg: Springer.
- DiClemente, R. J. (1991). Predictors of HIV-preventive sexual behavior in a high-risk adolescent population: The influence of perceived peer norms and sexual communication on incarcerated adolescents' consistent use of condoms. *Journal of Adolescent Health, 12*, 385-390.
- Farmer, M. A. & Meston, C. M. (2006). Predictors of condom use self-efficacy in an ethnically diverse university sample. *Archives of Sexual Behavior, 35*, 313-326.
- Helweg-Larsen, M. & Collins, B. E. (1994). The UCLA multidimensional condom attitudes scale: Documenting the complex determinants of condom use in college students. *Health Psychology, 13*, 224-237.
- Jemmott, III, J. B. & Jemmott, L. S. (2000). HIV behavioral interventions for adolescents in community settings. In J. L. Peterson & R. J. DiClemente (Eds.) *Handbook of HIV prevention* (pp.103-127), NY: Plenum.
- Jemmott, III, J. B., Jemmott, L. S., & Hacker, C. I. (1992). Predicting intentions to use condoms among African-American adolescents: The theory of planned behavior as a model of HIV risk-associated behavior. *Ethnicity & Disease, 2*, 371-380.
- 厚生労働省エイズ動向委員会 (2009). 第116回エイズ動向委員会結果報告 (Japanese Ministry of Health, Labour, and Welfare)
- Moore, S. G., Dahl, D. W., Gorn, G. J., & Weinberg, C. B. (2006). Coping with condom embarrassment. *Psychology, Health & Medicine, 11*, 70-79.
- 日本性教育協会 (編) (2007). 「若者の性」白書—第6回青少年の性行動全国調査報告 小学館 (The Japanese Association for Sex Education)
- Reber, A. S. & Reber, E. S. (2001). Social norm. In A. S. Reber & E. S. Reber, *The Penguin dictionary of Psychology, Third edition* (p.690), Suffolk: Penguin Books.
- Sánchez-García, M. & Batista-Foguet, J. M. (2007). Congruency of the cognitive and affective components of the attitude as a moderator on intention of condom use predictors. *Social Indicators Research, 87*, 139-155.
- 菅原健介・永房典之・佐々木淳・藤澤 文・薊理津子 (2006). 青少年の迷惑行為と羞恥心—公共場面における5つの行動基準との関連性— 聖心女子大学論叢, **107**, 58-77. (Sugawara, K., Nagafusa, N., Sasaki, J., Fujisawa, A., & Azami, R. (2006). Deviant behavior and shame in Japanese adolescents: Five behavioral standards for public space, *Seishin Studies, 107*, 58-77. (in Japanese))